

---

# 魔王と勇者が楽園で！

tomor

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王と勇者が楽園で！

### 【Nコード】

N3345BA

### 【作者名】

tom er

### 【あらすじ】

だーれもない楽園で魔王と勇者が2人きり！？  
へたれ魔王と鬼畜勇者のドタバタ日常系コメディ！！

不定期更新ですが、なにとぞよろしく願います。

## 第1話 魔王と勇者の将棋

二人の男女が対峙している。

男のほうは平々凡々、赤茶けた髪に茶の瞳。好青年と呼ぶには些か生氣に欠ける気がするが……まあ人並みといったところ。

一方女は絶世の美女と称して異を唱えるものなど世界に精々一人いるかどうかだろう。もっともその一人が問題なのだがそれは置いておこう。

ともかく、女の髪は流れる金系の川のように、陶磁のような白い肌には染みひとつ見当たりはしない。意思の強そうなその顔立ちに女傑と呼ぶに相応しく、緋の瞳は血と炎を押し固めた宝石のようである。

しかしその宝石は今現在、烈火の激情に燃えており、女的美貌を幾段か幼いものになっている。

「あ、王手です。魔王様」

「なっ ひ、卑怯な……。くう逃げぬ、逃げぬぞお！ 我は魔王ぞ、不退転の魔王である。退かぬし、負けぬ」

「いや、引かなきゃ負けですよ。いくら馬鹿でもルールを守らないお馬鹿とは遊べないですね」

「ぬあっ！？ 馬鹿？ 貴様、我を馬鹿と謗ったか？ くふふふ……覚悟しろよ勇者よ。我を馬鹿にして生き残った者はいないのだから」

らな。ふははははは」

盛大に笑う女      もとい魔王は、なんだかとても子供っぽいのだった。

楽園で魔王と勇者は向かい合って将棋をしていた。

魔王の手勢は壊滅し、最初の場所から動いていない暢気な王様は完全に包囲されていた。

「早くしてくださいよ。どうせ魔王様の負けですから」

「ぬぐぐぐぐ……許せ臣下よ。許せ民よ。我は、我は退く。しかし信じよ。これは決して敗北などではない。敗走ではないのだ。いづれ勝利を手に入れんがための退却なのだ！」

薄っすらと涙を浮かべ拳を握り締め決意する魔王。

王の駒の握り締め今、魔王の生涯における初めての撤退を打つ。いや打とうとした……。

「あれ？    むむう？    なあ勇者？    これ逃げられないか？」

先の気概も決意もどこへやら。純粹に疑問をぶつける。

「あ、そこ角道なんで無理ですね。というか詰んでますから魔王様の負けですよ。言っただじゃないですか、どうせ負けだって」

「ぬああああああああああああああああああ。なんだったんだ我の決意はっ！？初めてだったんだぞ？無駄じゃないか。負けてるのに一人であんな決意恥ずかしいぞっ！？」

「無駄なんて事ないですよ。魔王様の決意頂きました。実に見事な一人芝居でした。人は落ちるとこまで落ちるんですね。勉強になります」

「落ちてないっ！？全然まだ大丈夫だし、ちよつと退こうかなって思っただけだし、ウチのシマじゃノーカンってゆーか、全然悔しくないし……」

段々と勢いを失って涙を溜める魔王。

しかしここで泣き伏せるようでは魔王にあらず！ 湿気る心を再燃させ立ち上がる。

「よし。もう一度。もう一度だ。もう一度すれば勝てる。今のは練習だ練習。ワンモア」

「そこまでされたら流石の私も無碍にはできませんね。さあ魔王様。頭を地面から上げてください」

「土下座なんぞしとらんわっ！！」

「あ、服も着て良いですよ？」

「ええええええええええええ！？我全裸だったの！？全裸で土下座してたの？どうやったらそんな状態になるんだ！そこ

までしないともう一回やってくれないのかっ!？」

「……冗談です。馬鹿なこと言っていないで、とつとと駒並べてください。あ、私のほうのも並べてくださいね」

勇者に半ば呆れられた目を向けられる事に、納得はできない魔王だが、渋々と駒を並べていく。

せつせと並べる姿に世界の半分を支配した魔王の面影はなく、もはやただの子供のようである。

「よしできたぞ。我、先手な？ な？」

「ええ良いですよ。どうせ私の勝ちですし」

「くふふふ。今に吼え面をかくがいい。我に秘策あり」

緋の目を薄くし、口元をニヤリと上げる。

「征けアルフォード。一番槍はやはりお前が相応しい。我が霸道その先陣を切るのだ」

と魔王は高らかに玉前の歩を進める。そう、秘策とは駒に名前をつける事で一手一手に集中する事。

まさにその気迫まさに一軍の将、否！ その将を束ねる王の風格

「その身に刻め。必殺の陣形 一 暗黒殺戮舞踏 ダークネスサク  
リファイス ツー!」

ダークネスサクリファイス…… 舞踏が迷子なのは置いておいて、  
ひたすらに中央に戦力集中させ突破しようとする余りに杜撰な戦法  
であった。

「アルフォード、サンジェルマン…… 貴様らの犠牲は忘れはしない。  
貴様らが拓いた道は我が覇道ぞ！」

「デンドロツサ、ルーシエン、ドミニア……」

不幸にも戦局の読めない王に仕えた哀れな兵たちは、次々に勇者  
の手中に落ちてゆく。

「ああ…… ルツシエンホルグ。くうまだ我がいる。負けはせぬさ。  
我は魔を統べる王ぞ」

数分後。盤上には孤軍奮闘と呼ぶにも哀れな王がいた……。

「ぐぬぬぬう…… まだだ。たとえ一人になつたとしても今まで犠牲  
になつた者を想えば退けはせぬ」

駒に名前をつけた所為か、いつの間にやら感情移入している魔王。  
浮かぶ涙にも心なしに重みがある。

「はい。王手です」

「な、な、ななななああああああああああ！？」

絶叫 悲鳴と呼ぶには余りに悲しすぎる。悲憤とも呼べる嘆き  
であった。

「サンジェルマン……どうして、どうしてだああああああああ  
ああああ」

身を呈して守ってくれる兵 張れる駒などない孤独の王は、勇者が送り出したサンジェルマン 張られた香車の筋から、転がり逃げる。

「王手です」

「デンドロツサ……ドミニアまで！ 何故だ何故我を裏切るのだああああ！？」

次々と張られる駒。銀が追い、更に金が逃げ場を埋める。

哀れ、かつての臣下に追われる王は瞬く間に逃げ場を失っていく。

「くうう。勇者め、卑劣な。これが人間のやり方か、これが勇者のやり方か。おのれ、おのれ許さぬぞお」

もはや涙を拭うこともしない魔王。言葉面の威勢はともかく、もはや童女もかくやの有様である。

「ふう、仕方ないですね。返してあげても良いですよ？」

「……………え？ 本当か？ 我の臣下を、アルフォードをサンジェルマンをルツシェ……」

「本当ですとも、私が嘘をついた事などないじゃないですか」

町民Dの次男みたいな平凡な顔だが、浮かぶ笑みの胡散臭さは一



級品である。

「おおお。ならこの盤に出てるのもたぞ?」

喜色を隠す気すらない魔王に、威厳などは微塵もない。

「ですが、捕虜返還です。相応の条件を飲んでいただかなければ……」

「む、我が臣下のためなら、どんな条件だろうと飲もう。山のような金貨を積み上げようか？ それとも世界の半分でもくれてやろうか?」

「一人につき一枚」

「…………一枚? なに金貨か? はっはっはっ、何だ勇者よ。お前も謙虚」

「脱いでいってください」

「え? ええっと、世界の半分でも」

「こんな世界の半分なんて貰ってもどうしようもないです。ってか私のですし。脱いでいってください。それとも魔王様は兵を見捨てるのですか? 己が羞恥が惜しくて兵を犠牲になさるおつもりかッ!」

「ぬぐぐう、いやその、む、むう……………か、髪留めも一枚に数えてもよい?」

半数ほどの兵が戻った頃。孤高の魔王は、あっぱれ裸の王様にジ  
ョブチェンジを果たしていた。

「あの……勇者？ もう我、脱げるのないんだけど……」

もじもじと視線に晒される面積を少しでも狭めようと奮闘する魔王。実に意地らしい乙女の様である。

「ああ、そうですね。何せ私、勇者ですからね。腐り果てていても乙女は乙女、下着まで脱げと強要はしませんよ」

「我、勇者は乙女の服ひん剥いたりしないと思うなッ！！ これは酷い。あんまりだ。これ以上は無理」

「大丈夫です。特別に爪と皮膚も一枚と数えて良いですよ？」

勇者は微笑んだ。

会心の一撃！

魔王は泣いてしまった。

「嘘ですよ。嘘。ジョークです。勇者ジョーク」

「ふへ？ えっぐ、うう……ジョ、ジョーク？ ホントに？」

「ええ本当ですとも、私は至極真つ当な正直者として、それはもう有名だったんですから」

「我は時々貴様が怖くなる……」

勇者はボンと肩に手をおいてほほ笑む。

「では土下座です魔王陛下。お手並み拝見させていただきます」

「ふえ？ え、なにせ我が土下座せねばなんの？」

頬を濡らす涙の所為か、随分と気弱な魔王である。

勇者はハンカチでぐしぐしと魔王の涙を拭いてやり告げる。

「敗者が勝者に助命を請う場面ですからね。私も心苦しいのですが、なにぶんルールですので。まさか気高き魔王様が蔑ろになどしないでしょう？」

悪魔がいた。鬼がいた。勇者を騙り、人の皮を被ってはいるが、とんでもなく凄烈な笑顔だった。

「うえっ？ だって我まだ負けて……あっ、負けてる！？ なんぞ！？ なにがどうなってる？」

「いやあ骨が折れました。張り駒を取っ払っても詰みになるように配置して誘導するもの結構楽しかったですよ」

「ふああ、うう、うわあああああああああああああああああああああ。負けてないもん。我負けてなんかないもおおおおとおおおおおん」

堰を切ったように泣きながら走り去る魔王。

「はぁ……どこにいったても無駄なのに元気な人だ。どうせここには私と貴女しかいないんですから」

花咲き乱れ、果実は実り、望む道楽はすべてある。

だけど二人ぼっちの楽園の真ん中で、勇者はそつと呟いた。

## 第1話 魔王と勇者の将棋（後書き）

将棋がしてみたいtomerです。

コメディは難しい。そして何気に一話切りの連載は初めてです。書ききつて、訂正して、改稿して、を長く繰り返す性分なので、続き書かずに投稿するのは冗長が不安定になるばかり。

暗中模索、五里霧中、せつかく先が分からないんで、感想なんかでなんかこういうゲーム、遊びしてみろよ。なんてのがあったらやらせてみるかもです。

自分の中では既にネタ切れな気がしてならないので……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3345ba/>

---

魔王と勇者が楽園で！

2012年1月8日18時47分発行